

【不失花】うせざらむはな

私の住む地域の桜はほぼ終わってしまいました。

花が散ってしまうと、何やら心にぽっかり穴が開いたような脱力感におそわれませんか。

しかし、真の花はこれからますます盛るのです。ご年輩の皆様、貴方こそこれから盛る花なのです。今回はそんな話をしましょう。

不失花(うせざらむはな)とは枯れない花、散らない花という意味です。

世阿弥の著書『風姿花伝』やその他の伝書に説かれた能楽用語で、芸の真髄を表す言葉です。「まことの花」と同義語です。

「花」とは世阿弥の芸能論の主題です。「花こそが芸の命」と位置付け、各論で繰り返し説いています。

「花と面白きと珍しきと、これ三つは同じ心なり」といっていますから、表現の面白さ、美しさ、見る人の心に訴える驚き、芸の多様さなどを意味する言葉と私は理解しています。

どのような花をどう咲かせるか。そのためにいかに修練すべきか。これが世阿弥の論法のようなものです。

・もし、この頃まで失せざらむ花こそまことの花にてあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらむ花をもちたる為手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。 『風姿花伝』

・三十以前の時分の花なれば(中略)勝事あり。さりながら様あり、五十以来まで、花の失せざらむ為手(シテ)には、いかなる若き花なりとも、勝つ事有まじ。

『八帖花伝書』

上記は、世阿弥が年齢に応じた芸のあり方を語ったものです。

芸人は芸が未熟でも若ければ人目を引き人気を集めることができるのではないかと、という問いに対し、経験の浅い若い芸人の人気を「時分の花」とし、円熟した芸こそ「まことの花」「不失花」「老木の花」と答えています。

「不失花」とは円熟した芸の境地を表す言葉で、茶の湯にも通じる芸道の目標といえましょう。

桜の花も潔く散ってしまったこの時期に、桜の意匠の茶道具をいつまでも使い続けることほど野暮なことはありません。

季節を捉え道具を組むことが難しいこの時期に、かつて銘「不失花」の大徳寺物の茶杓を使った巧者がいらっしやいました。以来、好きな銘の一つとなりました。

「不失花」は芸道に限らず人生の道標ともなる意味深い言葉であると思います。

偶然ですがこのところの拙稿に謡曲に関する銘が続いています。謡曲は人間の本性を描きながらも、高度に洗練されているため、生々しい血や汗の臭いなどはなく、茶の湯の趣向になじみやすいと思います。

謡曲に馴染みのない方も、茶の湯を通して親しんでいただければ幸いです。